

2) シンガポールにおける革命運動

1900 年以前のシンガポールに、革命党の志士は存在していなかった²⁸。1900 年 7 月に孫文と滔天が強制出国させられた後、孫文は革命活動拠点としてシンガポールに着目していなかった。だが、5 年の月日が過ぎた 1905 年、ようやく変化が訪れた。

1905 年、『図南日報』は乙巳年の新年を祝うため、カレンダーを印刷し配ったが、この表紙には「中国の文明が塗炭の苦しみに陥るのになぜ耐えられようか。中原の豪傑を率いてわれらの山河を奪回せん」という題辞が記されていた²⁹。ほかにも「自由の鐘」や「独立の旗」などの挿絵が入っており、旗の上には「同胞国民万歳万歳万歳」という文字が書かれていた。孫文はホノルルでこのカレンダーを目にし、この革命的姿勢と反清のデザインにいたく喜び、20 元を送り 20 部購入した³⁰。また、孫文はシンガポールの尤列に書簡を出して『図南日報』の詳細について尋ね³¹、初めてシンガポール華人の革命運動を知ったのだった。ここから、孫文とシンガポールは固い絆で結ばれ、それは辛亥革命の成功まで続いたのである。

『図南日報』の創刊者は張永福と陳楚楠だった。二人はともに富豪の二代目で、またシンガポールにおける「辛亥人物³²」として中堅的人物であり、孫文が海外で革命運動を宣伝するうえで主要な支援者となった³³。張永福の本籍は広東省饒平県樟溪鎮青崗村楊梅坑³⁴であり、生粋の海峡華僑であった。その祖父は早くから南方に渡来し、ジョホールバルで甘蜜と胡椒の栽培をしていた。張永福の父・張礼（別名は張理、1833-1899）は絹織物や生地の商売をし、代理店も兼ねる一方、不動産投資も手がけていた³⁵。このため張永福の代にはすでに相当な経済的基盤を有していた³⁶。

陳楚楠は張永福の商売仲間で、本籍は福建省廈門である。陳楚楠の父・陳泰（1839-1898）はさらに赫赫たる豪商で、雑貨や木材の輸出入を生業としていた³⁷。張永福の母方の甥・林義順（その母・張春蓮は張永福の姉）は、孫文の忠義ある支持者で、この三人は「シンガポール三傑」と呼ばれた。



張永福（左）と陳楚楠（右）と孫文（中）
【提供：シンガポール国家档案馆】

裕福な家庭に育ち、高い教育を受けた彼らは、新しい思想を容易に受け入れた。張永福は古体詩を詠み³⁸、陳楚楠もかつて「思明州少年」の筆名で『天南新報』³⁹に政治評論を発表して革命精神を鼓吹し、後には革命志士たちの思想を代弁する『図南日報』の発行を計画した⁴⁰。なかでも林義順は熱心な孫文の追隨者であった。これらの事柄は、海外の華人の思想と富が逆流し、中国の政局に影響を与えた一つの実例である⁴¹。

こうしてシンガポールの有識者たちが孫文と知り合ったことで、その後シンガポールで同盟会の分会が設立される礎が築かれた。彼らは瞬間に、孫文という人間の魅力と思想に強く惹かれ、さらにはその指導を受けたいと願い、



『図南日報』（1905 年）は当時革命派の志士のシンガポールにおける代弁者であった【出典：『南洋と民国創立』（1933 年）】

物心両面で孫文を支持した。張永福がその私宅である晚晴園を開放し、孫文の反清革命の基地として提供したことはその顕著な例であろう⁴²。孫文は、張永福と陳楚楠の社会的ネットワークを通じて、さらに多くの実業家たちと知り合った。例えば陳嘉庚（1874-1961）、陳武烈（1874-1934）など華人社会集団のリーダー的人物と交友を結び、それは革命の推進と発展へとつながった。辛亥革命の成功後、林義順、陳嘉庚、陳武烈らは国民政府を支持し続けたが、この時期すでにその基盤が形成されていたのである。

『閩南日報』の宣伝により、シンガポールと孫文の間に深い縁ができ、その結果シンガポールは近代中国革命において大きな役割を果たすことができた。このことからメディアがどれだけ影響力を有していたかがわかるであろう。この後十数年にわたり、新聞メディアは重要な役割を担うこととなる。辛亥革命成功後、20世紀初期に、シンガポールの二大中国語新聞『叻報』と『新国民報』の間に論戦が起こったが、これは良い実例である。論戦の焦点は「孫文を広東政府総統に指名することは合法か否か」という問題で、『叻報』は保守派を、『新国民報』は国民党を代弁した。『叻報』はその社説で、孫文が指名を受け入れて総統となるのはよくないと論じた⁴³。この社説は、ただちに『新国民報』の反撃を招き論戦が開始されたが、それは後の話である。

孫文はシンガポールで少なくとも三つの勢力と対峙しなければならなかった。すなわち、清国の駐シンガポール領事、康有為（1858-1927）の改革派、そして海峡植民地政府である。1900年に孫文が初めてシンガポールに到着してから1911年の辛亥革命成功までの11年間で、清国は六名の駐シンガポール領事を派遣した⁴⁴。目下私たちが見ることのできる孫文のシンガポールでの活動と直接関連のある清国の機密資料のうち、左秉隆総領事⁴⁵が清国外務部に宛てた電文が、問題の所在をよく物語っている。

シンガポール総領事より外務部へ（正月五日）

一月四日、孫文が到着。シンガポールの主要人物張永福、シンガポール総督はこれを知るも拒まず。

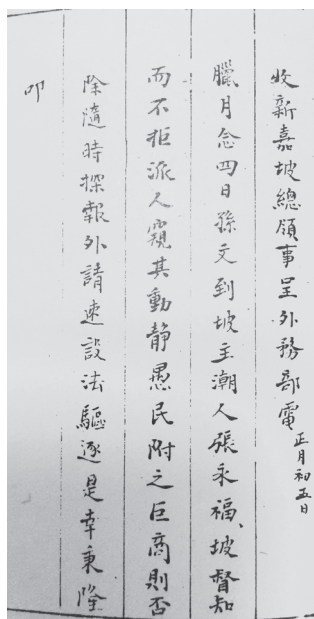
人を派遣しその動静を窺うに、愚民がこれに追随し、豪商はそれにあらず。

随時報告を受けられ、策を講じ速やかに追放されし、幸甚なり 敬具

秉隆記す⁴⁶。

海峡植民地の資料によれば、孫文がこの時シンガポールに到着したのは1908年1月27日⁴⁷であろうと思われる。この秘密電文が送られた結果、孫文が強制追放されることはなかったものの、シンガポール滞在期間における彼の言動と行動が清朝廷の監視を受けたことは疑う余地がない。

二つ目の勢力が康有為である。戊戌政変の後、康有為をはじめとする改革派は、七回にわたりシンガポールに出入りし、維新と君主制思想を鼓吹した。康有為がシンガポールを訪れたのは孫文とほぼ同時期で、すべて1900年のことである⁴⁸。邱菽園（1874-1941）⁴⁹は康有為の主な支持者であった。しかし日清戦争に敗れてからというもの、康有為の維新運動は途端に求心力を失った。海外の華人たちは「革命の母」となったのである。孫文のシンガポール及び海外の革命基地である晚晴園が、中国の悠久の歴史の変革において一つの位置を占めることができたのは、日清戦争の結果であったとも言えるかもしれない⁵⁰。後、邱菽園は民主革命思想の影響を受け、革命派の人々と積極的に交友を深めている。だが、孫文には終始好感をもたず、辛亥革命成功後も依然として孫文を批判する文章を発表してもいた⁵¹。



「軍機処より、シンガポール総督のために人員を派遣し孫中山の行動を監督し策を講じて強制出国させた事件に関する外務部への電報」(光緒三十四年正月初五日 1908 年 2 月 6 日)【出典:中国第一歴史档案馆編『清朝中国と東南アジア各区にとの関係档案資料匯編』、北京:国際文化出版公司、1998 年 4 月】

また、海峡植民地政府の孫文に対する態度も極めて重要である。当時シンガポールは英国植民地であり、このため海峡植民地総督の行動はロンドン植民部または外交部の政策を代表するものであった。シンガポール国立大学政治系高級講師の李励図が、英国植民部、外交部の文書を用いて、二人の海峡植民地総督の孫文に対する態度について分析しており、これは大変参考になる⁵²。李励図によれば、海峡植民地政府は孫文の出現に対し、政策上制限付きで容認するという立場をとっていた。これは中国の改革者に対する海峡植民地政府の同情を示す一方、孫文が海峡植民地をその革命事業の基地として利用し、華人団体の不満を招き、ひいては海峡植民地の平和と安定を脅かすようなことは受け入れられないという意思の表れでもあった。英国植民部と外交部は、歴代の海峡植民政府総督が孫文の事件に対してとった一切の決定を、完全に認めたわけではなかったが、彼らと海峡植民地政府の決定とは必ずしも衝突していたわけではなかった⁵³。

孫文のシンガポール滞在期間、海峡植民地の総督代理と総督は、ジェームス・アレクサンダー・スウェッテナム(任期:1899 年 12 月 7 日-1901 年 11 月 5 日)とヨハン・アンデルセン(任期:1904 年 4 月 16 日-1911 年 9 月 2 日)であった。彼らは独立して行動する特権をもっており、この二人の孫文に対するいかなる行動も、個人的判断でありながら、英国の態度を代表するものでもあった⁵⁴。

3) 海外における孫文の革命基地

1879 年、13 歳の孫文は故郷・広東省香山翠亨村を離れ、兄とともに海を越えてホノルルへ渡り、その後香港へ移って医学を学んだ。そして、西洋教育の影響を受けたことから、弱体化した中国の振興を求め、必ずや政治体制を改変すべきとの主張をもつようになった。1895 年に広州蜂起が失敗すると、清朝廷の追手から逃れるため、海外を転々としながら、依然として革命を鼓吹し続けた。その亡命期間の中で、日本は彼が最も長く滞在した場所であったが、孫文は日本の華人社会集団からの支持を得るために行動し、また、後に革命支援をしてくれることとなる多くの日本の友人と交友を結んだ。

1895 年 11 月、孫文は初めて日本の神戸に到着し、同年横浜において興中会を設立した。その後神戸には十八回訪れており、神戸は孫文にとって海外での革命運動の中心となった最初期の場所だと言えるだろう⁵⁵。そして 1905 年 8 月、中国同盟会が東京で正式に設立された。しかしながら、清朝廷の外交圧力によって、1907 年、日本政府は孫文を強制追放し、それに伴い孫文のもう一つの海外革命基地—シンガポールの重要性が増すこととなった。孫文がシンガポールを訪れた回数はちょうど神戸の半分である⁵⁶。海外華人の実業家が孫文を支持したという図式において、シンガポールの晚晴園と神戸の移情閣はきわめて似通った場所である⁵⁷。

シンガポールは東西の交通の合流点であり、清末の海外紀行文で早くから「南洋第一の埠頭」として誉れ高い地であった⁵⁸。1819 年に英国植民地となつてからは、商業活動が非



孫文が宿泊したゴールデンベル・マンション（年代不詳）【筆者撮影】

常に活発になり、インフラと通信設備も徐々に完備された。また東南アジア地域において、華人の人数が最も多く、最も豊かな土地であったこともあり、革命党の東南アジア華人社会活動の総合機関として、シンガポールは極めて大きな潜在能力を持っていた⁵⁹。そればかりでなく、歴史上、シンガポールと中国は悠久の絆を有し、シンガポールは中国が海外で初めて領事を置いた場所（1877）でもあった⁶⁰。これらのことは、海外華人の経済的支援を期待していた反清革命運動の総指導者・孫文にとって、彼がシンガポールで革命運動を行う大きな要因となった。

さらに、明末の反清運動が失敗した後、多くの反清義士がシンガポール・マレーシア一帯に避難してきた。マラッカ第二期カピタンの李為経（1614-1685）⁶¹は、反清復明の義士であった。シンガポールのラベンダー・ストリートの土地神の廟にも七十三名の「反清復明の義士」の位牌が安置されている⁶²。また、洪秀全（1814-1864）が指導した太平天国の農民運動は、梁垂発（1789-1885）の『勸世良言』という著書の影響を受けたものであったが、この梁垂発は印刷職人で、かつてマラッカとシンガポールという二つの土地で仕事をしてきた。つまり、シンガポール・マレーシア地区には早くから革命の火種が存在していたのであり、孫文の到来はただそれに火をつけただけだと言うこともできよう—晩晴園はこの歴史の証人なのである⁶³。

1900年から1911年までの11年間に、孫文はシンガポールを九回訪れ、うち四回は晩晴園に宿泊した⁶⁴。中国の近代史上、晩晴園の辛亥革命に対する貢献は紛れもない事実である。孫文が初めて晩晴園に宿泊したのは1906年2月16日のことであった⁶⁵。中国同盟会は、

すでにその数カ月前に東京で設立（1905 年 8 月）されていた⁶⁶。孫文は晩晴園に三、四日滞在した後、同盟会シンガポール分会を設立した⁶⁷。ここに、東南アジアの華人社会における革命党の正式な組織が誕生したのであり、その出発点こそが晩晴園だったのである⁶⁸。

その三年後、晩晴園はシンガポールの革命志士が集う場所⁶⁹となっただけでなく、東南アジアの華人革命党全体の総合機関となった。孫文、胡漢民、汪精衛、黃興ら近代の風雲児が、ここで国事を語り、数千年来の封建専制政権を転覆させるために心血を注いだ。同盟会の党規約はここで制定され（胡漢民が起草した）、この党規約はその後東南アジア各地の同盟会分会の模範となった⁷⁰。さらには中国近代史上多くの名だたる戦役、例えば黃岡蜂起（1907 年 5 月）、鎮南関蜂起（1907 年 12 月）、河口蜂起（1908 年 4 月）などは、すべて晩晴園で計画されたものであった⁷¹。

孫文はシンガポールで、晩晴園を主要な反清革命の基地としたほか、陳楚楠のビーチ・ロード 327 号の木材工場や、張永福の織物問屋（ビーチ・ロード 105 号）を連絡と協議の基地とした。1908 年 12 月以降、孫文はクラブ・ストリート 85 号及びセシル・ロード 77 号のホテルに転居した。クラブ・ストリート 85 号の旧跡は現存しており、現在はフレンチレストランになっている。セシル・ロードのホテルは 1930 年に取り壊された⁷²。もとはアルメニアン・ストリート 51 号に位置し、現在カントンメント・ロードに移転した「同徳書報社」の扁額は、かつて孫文が揮毫して贈ったものである。晩晴園、または他にこの歴史の証人となった遺跡はシンガポールの貴重な歴史文化財となっている⁷³。

4) シンガポールにおける宮崎滔天

かの「ロンドン事件」（1896）の発生以前⁷⁴、孫文はまだ無名の人物であった。「ロンドン事件」以降、西欧メディアの大々的報道によって、孫文は一夜にして国際的に知られる革命の指導者となり、このときから彼の追隨者が世界各地から集まり、彼の革命思想に心服した。宮崎滔天は彼の日本の友人だった。

1897 年 9 月に横浜を訪問した際、孫文は陳少白^{ちんしょうはく}⁷⁵の家で初めて滔天と会った。そして同年 11 月には荒尾の宮崎家を訪れている⁷⁶。1905 年に中国同盟会が設立されたが、滔天は同会に加盟した最初の外国籍会員の一人であり、孫文が日本で最も信頼していた革命の友であった⁷⁷。滔天は孫文の革命事業を生涯支持し、日本人支援者たちは孫文に対する尊敬から滔天のことも尊敬した。現在、荒尾市の宮崎兄弟の生家及び宮崎兄弟資料館には、当時の情景が保存され、孫文と滔天が筆談している歴史的場面が再現されている。ここは近代中国と日本の歴史を理解し、両国の友好的交流を促進するための場所となっている。

滔天とシンガポールがつながったのは 1900 年 7 月のことであった。それは戊戌の変法の失敗後、康有為が香港に亡命したことがきっかけとなった。しかし香港は中国に隣接し安全とは言えなかったため、英国外交部は康有為に香港から離れて別の英国領へ行くよう提案した。1900 年 2 月 2 日、康有為は香港からシンガポールへ渡り、シンガポールの知識人・邱菽園のもとに身を寄せ、客雲廬に逗留した。客雲廬は恒春号の三階にあり、旧住所はボート・キー（Boat Quay）17 号で、すなわち邱菽園の父が営む米屋の所在地であった⁷⁸。清朝廷は海峡植民地に対し、康有為を強制出国させるよう要求したが、総督ジェームス・アレキサンダー・スウェッテナムと英国植民部、外交部らはこれを拒絶した。海峡植民地政府は康有為に対し、シンガポールにおける警察の保護を提供し、清朝廷の逮捕または暗殺から防衛した。英国はかねてより政治難民を保護する伝統的政策をとっており、康有為とその改革運動に同情を寄せていた。このことが、康有為の海峡植民地滞在の助けとなった⁷⁹。

孫文は康有為がシンガポールに居ることを知り、滔天、清藤幸七郎、内田良平に依頼して、康有為と「連合陣営」を組織し、共に大計を立て、まもなく発動する惠州蜂起の革命軍用資金を集め⁸⁰、清王朝を転覆させることを企図した。これ以前の 1898 年、すなわち戊戌変法の失敗後、滔天は日本へ逃亡する康有為を香港まで迎えに行っており、これをきっかけに滔天と康有為との間には交友関係があった⁸¹。1900 年 6 月 29 日、滔天と清藤の二人が先にシンガポールに到着し、康有為と面会しようとした。康有為は特殊な意図をもって自分に会見したいという日本人がいることを知り、これを拒否したばかりか、滔天らを西太后が派遣してきた刺客だと疑った。7 月 5 日、康有為はシンガポール警察に通報し、7 月 6 日、総督の特別令により、二人の日本人を徹底捜査した。この際、警察は彼らが剣二振り、2 万 7000 元の銀行為替と 250 元の現金を所持していたのを発見し、滔天らを逮捕した⁸²。

日本の友人が逮捕されたという知らせを聞き、孫文は偽名を使い、7 月 9 日、香港からサイゴン経由でシンガポールへ向かった⁸³。日本人数名とヨーロッパ人一人も同行していた。シンガポール到着後、孫文は彼の香港留学時代の旧友である呉傑模と黄康衢に連絡し、この二人の医師を通して、当時の立法局の議員であった林文慶（1869-1957）に協力を求めたが、不成功に終わった。植民地政府は滔天らを強制出国させ、5 年間入国を禁じた。1900 年 7 月 12 日、孫文はその同行者とこの二人の日本の友人とともに、佐渡丸に乗船してシンガポールを離れた⁸⁴。

海峡植民地政府にとって最も重要なのは康有為の安全であり、その次にこれら日本人の活動が現地の華人のなかで動乱を促すことを懸念していた。そして第三に、海峡植民地政府は革命分子がシンガポールで武器を購入し、シンガポールを革命運動の基地として利用することで、海峡植民地と中国のみならず、ロンドンと北京の関係にも支障をきたすのではないかと考えていた。こうした理由で、滔天らの強制出国はまさに理に適った解決法だったのである⁸⁵。

孫文については、総督スウェッテナムはすでに著名な中国の革命家として注目していた。孫文が偽名でシンガポールに短期間滞在したとき、総督、警察局および滔天らの釈放のために支援を求めようとした人物のほかには、孫文は誰とも面会しなかったため、スウェッテナムは孫文が海峡植民地においてさほど大きな影響を与えはしないだろうと考えていた。孫文自身も、この時はまだ革命の支持基盤拡大の可能性が海峡植民地にあるとは気づいていなかった⁸⁶。孫文とシンガポールとの関係に新しい発展がみられたのは、1905 年の『閩南日報』発行以降のことであった。

結 び

1900 年、康有為、宮崎滔天と孫文は時を同じくしてシンガポールに到着した。とりわけ康有為と孫文のシンガポールでの活動は、中国に対する現地の華人社会の関心を喚起し、海外の華人が祖国の政治に参加する機会を啓蒙し押し広げた。特にこの二つの政治的パワーは互いに競い合い、対立し内部分裂しつつ、現地の華人たちが政治に関わることを促し、「それにより海外華人の中華民族主義のアイデンティティが形成され」、シンガポールとマレーシアの華人社会における政治的思潮に多大なる衝撃をもたらした⁸⁷。

孫文の革命理念は一切の団結し得る力を結集し、君主専制を転覆させ、共和制を建設することであった。辛亥革命の成功により、権威主義が打倒されたが、これは「権力崇拜」、「権威崇拜」という普遍的な社会心理に対する大きな挑戦であった。これにより、辛亥革命は海外華人の社会と心理状態にも深い影響を与えたのである⁸⁸。

晩晴園は辛亥革命の時期に重要な役割を担った。その歴史はまたシンガポール華人の歴史における重要な一節である。近年、晩晴園の研究員が精力的に資料収集と文献調査を行い、晩晴園資料館の館史を更新すべく準備している。館内の展示内容を充実させるほか、『晩晴園シリーズ叢書』を出版する計画で、張永福の『南洋と民国創立』（2013 年 12 月）、林義順の『シンガポール同盟会録』（2015 年 11 月）など⁸⁹、特にシンガポールの歴史と関連する辛亥革命の史料紹介に力を入れている。

今回、晩晴園と宮崎兄弟資料館は孫文と宮崎滔天、日本とシンガポールの革命事跡について共に共同研究報告書を発刊した。この共同報告書は、両館の学術交流を促進する新たな試みとして、孫文と滔天の友情を記念するだけでなく、今を担うスタッフたちの強い意志でもって、両国家間の交流の発展という目標を達成し、民主と公正を備えた世界における平等社会の建設にも寄与するものと評価できるであろう。

Ⅱ. 孫文と宮崎滔天—その出会いと友情

1) 「宮崎兄弟」の源流

荒尾・宮崎家の歴史は、1647 年に宮崎弥次兵衛正之（生年不詳、1676 年没）が荒尾村に在御家人として定住したことから始まる。『先祖附控』⁹⁰や先行研究によれば、宮崎家の遠祖は菅原道真（845-903）にまで遡るとされており、道真公から十四代目の信政が筑前国三笠郡宮崎村（現在の福岡県筑紫野市か）に移り、信政の二代後の信高から宮崎姓を名乗るようになったといわれる。1667 年、正之が細川藩から一領一正（郷土）⁹¹に任じられ、以後、「宮崎兄弟」の父である長蔵に至るまで、荒尾・宮崎家は約 200 年間にわたって荒尾有数の郷土の家として続いた。

一方で、宮崎家は外聞⁹²の役目も担っており、このことが、宮崎家が同時代の他の郷土に比べて進取の気質を有していた一つの要因と考えられる。

さて、「宮崎兄弟」が生まれ育った 19 世紀後半という時代は、まさに日本のみならず、東アジア全体が大きな転換を迫られた時代である。西欧列強の脅威が迫るなか、いかに近代国家としての体制を整えていくか、各地域でその行く末が模索された時代であった。こうしたなか、滔天は父や兄たちの影響を受けて、「世界革命」を目指していくことになる。

まず、彼の出発点に「宮崎兄弟」の父・長兵衛政賢（1818-1879、のち長蔵に改名。以下、長蔵と記す）の存在があったことは間違いないであろう。長蔵は 10 歳を過ぎた頃から、学問に加え、居合・砲術・剣術を学んでおり、叔父である八代目の淳次政明の養子となって、16 歳で宮崎家を継いでいる。剣豪として知られ、かつ義侠心が強く、平等主義的な思想の持ち主であったことを窺わせるエピソードが今日に至るまで伝わっている。たとえば、息子・滔天はその著書『三十三年之夢』の中で、次のように語っている。

父上は十一歳の時にこの世を去り玉ひたれば、その事の記憶に存するもの少なけれども、撃剣の道場を開いて子弟を教導せられしことは、微かに余が記憶に残れり、手作りの西瓜を馬に着けて、親ら村中の老人、病者を恵み廻り玉ひしことも記憶せり、時に酒に酔ふて大声を發し大手を拡げて、無作法に歌ひ舞ひ玉ひし其面影の如何に恐ろしかりしことも記憶せり、殊に明々地に頭脳に印せられて忘れざるは、豪傑になれ大将になれと、日に幾度となく余が頭を撫でて繰返し玉ひしことと、金銭に手を触るる毎に、…（中略）…酷く叱り玉ひしことなり⁹³

また、長蔵の娘・富の子である築地宜雄氏も、長蔵について次のように語っている。

又正賢は正月の賀客を待つにすべて平等、到着順とした。早やばやと大谷からかけつけて来る藤左衛門を最上席の床の前に、其他お寺の和尚さんでも村役人の人たちでも百姓でもすべて到着順とした。これは当時としては破天荒なことであるが、正賢の気持ちには尊いものに奉仕する心は身分によりて上下はなく、其心を尊長して人を待つと云うようなところがあったためであろう。人権平等とか民主主義とか云う考の流行する前に、かく考えかく実行していたのが正賢でありました⁹⁴。

父・長蔵のみならず、母・サキもまた「暈の上に死するは男子何よりの恥」と子どもたちに教えるような人であったという。このように、名誉や金銭に執着することを善しとせず、それぞれが天性を伸ばし飛躍することを思う両親のもとで育ったことが、「宮崎兄弟」が誕生する背景にあったと言える。

2) 近代日本と宮崎八郎

長蔵とサキの間には、八男三女の子どもがいた。だが、その多くが早逝し、20歳を過ぎるまで成長したのは、八郎・民蔵・彌蔵・寅蔵（滔天）の四人の男子と留茂・富の二人の女子であった。この四人の男子のことを、「宮崎兄弟」と呼んでいる。



宮崎八郎【所蔵：荒尾市】

「宮崎兄弟」一番目の男子である八郎は、実質的な長男として両親の期待を一身に背負い、近代日本の創生期という荒波に身を投じていった男である。学問にも武芸にも優れていた彼は、在御家人の子弟としては異例の細川藩校・時習館への入学を許されたのみならず、特待生制度である居寮生に拔擢され、さらに1870年には洋学修学のために東京遊学を命ぜられている。

当時の日本の状況を一言で言うならば、欧米諸国の近代的な事物や思想・技術など、ありとあらゆるものの導入が試みられ、明治維新政府を中心に近代国家日本への道を歩み始めていた時期であると言える。八郎が父に宛てて送った書簡からは、こうした日本及び東アジアを取り巻く動きを注視していた彼の様子や、廃藩置県や四民平等に向けた改革を「愉快の事共に御座候⁹⁵」と評す彼の基本的姿勢を窺い知ることができる。

だが、彼の生涯において特筆すべき点は、「植木学校」創設（1875）をはじめとした民権運動である。「人民は生まれながらにして自由の権をもち、人民も国家意思の決定過程に参加する権利をもつものであると主張する運動は、九州ではまず熊本において花開いた⁹⁶」と評されるが、八郎はまさにその先駆けであった。ルソーの「社会契約論」の日本語訳である『民約論』に接した八郎は、その思想に深く感激し、次のような漢詩まで読んでいる。

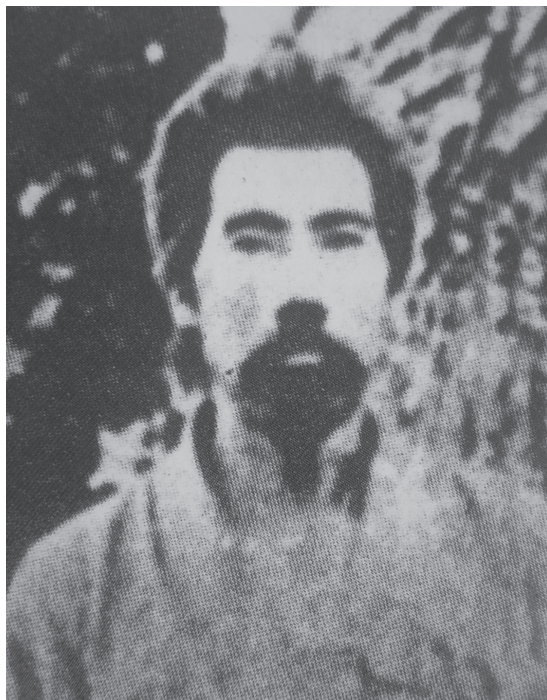
天下^{てんか}朦朧^{もうろう}として皆^{みな}夢魂^{むこん}
危言^{きげん}、独り乾坤^{けんこん}を貫かん^{くわん}とす
誰か知る凄月^{せいげつ}悲風^{ひふう}の底
泣いて読む、盧騷^{ろそう}民約論^{みんぎやくろん}⁹⁷

以後、八郎は民権運動に突き進んでいく。仲間たちとともに創設した植木学校は、ルソーの『民約論』やギゾーの『文明史』、モンテスキューの『万法精理』などを教材に用い、また天賦人權の啓蒙や民選議員、県民会開設要求といった人民主権への要求を県内外各地で遊説して回るなど、民権運動の活動拠点となって最盛時には 80 人もの生徒が集まった。軍事訓練などの実践的授業も行っていたことから、わずか半年後には廃校を言い渡されることとなったが、その後の日本の民権運動の嚆矢^{こうし}としてその歴史的価値は高い。

こうした彼の活動の最終局面となったのが、1877 年 2 月に始まった西南戦争である。鹿児島^{鹿児島}の西郷隆盛が挙兵すると、「西郷でなければ政府を倒すことはできず、まずは西郷と共に有司専制の政府を打倒し、そのあと、西郷と今後の日本の方針について協議する」べきであるという考えから、八郎は仲間たちと「熊本協同隊」を組織し参戦している。この「熊本協同隊」は幹部を公選によって選出し、また占領地で山鹿・植木地域自治政・民政を施行するなど、戦いの中においても民権思想の実現を試みる希少な存在であったが、歴史の結果として、彼らは政府軍に敗北し、八郎もまたこの戦いの中で命を落としている。

八郎の戦死の知らせが宮崎家に伝えられたとき、長蔵は「よいか、宮崎家の者は、もう一生、官の飯なぞ食おうと思ふな」と慟哭したというが、これはまだ幼かった民蔵・彌蔵・滔天ら三兄弟の中に鮮烈な記憶として留まることとなった。滔天は親類縁者や村人たちから何かにつけて「兄様のようにになりなさい」と言われ、偉大な兄八郎の存在が彼らの心に棲みつくこととなる。

3) 土地均享論者・民蔵と革命的アジア主義者・彌蔵



宮崎民蔵【所蔵：荒尾市】

さて、宮崎滔天の生涯において、父・長蔵と偉大な兄・八郎に加えて、残り二人の兄の存在もまた欠かすことができない。民蔵（1865-1928）は滔天に「貧」という問題を認識させ社会活動に向かわせた人物であり、また彌蔵は滔天が中国革命をめざす直接的なきっかけを作った人物である。さらに、民蔵・彌蔵はともに孫文との関係においても看過すべきではない。これら「宮崎兄弟」と孫文との関係について、以下、見ていこう。

兄・八郎と父・長蔵が続けて亡くなったために、民蔵はわずか 16 歳で宮崎家の家督を継いだ。そしてその最初期から、「土地問題」に着目し、それを生涯の課題とした。それは、アメリカの慈善家であるアンドリュー・カーネギー（1835-1919）へ送るために彼が後年に記した手紙草稿の一文からも窺い知ることができる。

小生ハ日本ノ僻村へき そん農家ノ間ニ成長セシ者ニテ候ガ、人心付キシ頃ヨリ身ノ周囲ニ接現スル借地農民ノ窮状ガ痛ク目ニ触レ印セラレ居タルニ、回顧スレバ今ヨリ二十四五年前、小生十七八歳ノ頃、挙国自由民権ノ政論盛ニ唱道サル、ニ際会シ、学事ニ従ヒ居タル小生ハ心竊カニ此主張ノ実行ハ大ニ民福ヲ増進スルモノナルコトヲ感知スト同時ニ、之レニ因レバ借地農民ノ窮状ハ果シテ救治スルヤ否ヤニ想到シ、長キ月日ノ間思考想索ノ上、借地人民ノ悲運ハ各民人ガ皆土地ヲ獲得スルノ通路ガ法制上ニ正確ニ保障セラル、ニアラザレバ政治上ニ於ケル他ノ改革ハ如何ニ善良ニ成サル、トモ改転サル、理ナシト想到シ、斯ク想到スルヤ⁹⁸

民蔵が「土地問題」に着目するようになった 1881 年当時の日本国内は、「明治十四年の政変」により大蔵卿に就任した松方正義まつ かつ まさ よしが、紙幣整理を徹底して行うとともに、増税、官業払下げ、歳費削減等の緊縮財政の実施を断行したため、「松方デフレ」と呼ばれる深刻な不況の開始期にあった。米価が急落する一方、地租の額は変わらないために貧しい農民は租税納入に苦しみ、高利で借りた借金の返済に追われるなど、農村が疲弊していった時期である。宮崎家の若い当主となって一家の地所を見て回り、小作人が困窮する状況を目の当たりにした民蔵は、同じ人間のあいだにこんな不平等があつていいものか、これは自分が解決しなくてはならぬ問題だ、と靈感に打たれたように感じたのであつた⁹⁹。

以後、民蔵の「此問題ノ解決ガ自心ニ付ク迄ハ何事ニモ着手スマイト考究思索ニ従事スル¹⁰⁰」日々が続いた。弟・彌蔵や滔天らと議論を重ね、また様々な宗教や社会問題に取り組んでいくなかで、民蔵は「天造物である土地には万人が平等にこれを共有する権利が与えられており、これをはばむ土地私有制こそ人類不幸の最大原因」で、これを「解除するこそ我が生涯の最大要件なり」という天啓を得て、この「土地均享主義」の実現をめざす活動を国内外で展開していく。日本では、1902 年に仲間を集めて「土地復権同志会」を結成し、1897 年から 1900 年にかけてはアメリカやイギリス、フランスに渡って、各地の土地事情や土地制度を研究、関係団体との交流を図った。

これらの経験を経た民蔵は、1905 年に自らの思想をまとめた『土地均享 人類の大権』を著している。「社会組織の不完全なる、現在に於ては、人權の要求すべきもの一にして足らずと雖も。實際上道理上、土地に対する人權の回復より緊急大切なものはなし」との断言から始まる本書の核となっている「土地均享主義」は、後年、孫文が「三民主義」の「民生」で掲げた「平均地権」と共通点を有するものであり、民蔵と孫文はこの点においてつながることとなる。1897 年 11 月、初めて孫文が荒尾村の宮崎本家を訪れた際に、民蔵が収集していた土地に関する書籍類をトランクいっぱい詰めて帰ったというエピソードは、後の二人の交流を予兆したかのような話である。

「大逆事件」の影響により日本国内での土地復権運動の継続が困難になった 1910 年以後、民蔵は孫文がつくろうとする新しい中国に自らの夢の実現を託して、彼の革命運動を支援していくこととなる。そもそも滔天に孫文の存在を示したのは、彌蔵だけではなかった。民蔵もまた、渡米していた折に孫文に関する記事を英字新聞の中に見つけ、日本にいる弟・滔天に手紙を送っていたのである。その手紙は滔天が孫文と出会うことになる 3 か月前の 1897 年 6 月に送られている。